

「アルジャーノンに花束を」という表紙に書かれたシンプルなタイトルに惹かれてこの本を手にとった。

この本は知的障害を持つチャーリー・ゴードンが、脳手術により急激に天才と呼ばれるまで知能が発達し、最終的に戻ってしまうというフィクション小説だ。32歳のチャーリーはパン屋で働く IQ70 の男だ。周りの人々が彼を馬鹿にしていることも気づかず純粋な気持ちで賢くなりたいと願う彼が、ある実験の被験者として選ばれた。その実験とは知的障害を取り除き急激に知能が上昇するというものだった。手術成功後、科学や文学を驚異的なスピードで吸収し、知能が急上昇する。しかし、孤独や人間関係の複雑さを知り手術前とは違う問題に悩まされることとなった。そんなときに自分と同じ手術を受け、知能がとて高くなった実験マウスのアルジャーノンと出会い境遇を重ね合わせるようになっていく。物語はチャーリー本人が書く「進捗報告書」形式で進んでいくため、彼の内面や知能が上がっていく過程がとて分かりやすくなっている。

読み進めるうちに、チャーリーの変化に心を奪われた。最初の無垢な視点から、知能上昇で自分や周囲を見直し、最後は知能低下で混乱する過程が鮮やかに描かれていて、目が離せなくなってしまう。特に、アルジャーノンの死によって、自分も近いうちに知能が低下することに気が付いたときはとてやるせない気持ちになった。

物語が大きく動いたのは、チャーリーも知能が再び低下し始めた頃だ。かつての純粋さを取り戻す一方、手に入れた色々を失っていくのを痛感する彼の心情にリアルな人間味を感じた。

「知能が高くては幸せとは限らない」ということを気づかされた。ラスト 30 ページが特に心に強く刺さった。チャーリーが自分の限界を受け入れ、飾らない姿でこれからに挑む姿がとてカッコよく感じ、今の自分も受け入れることが大切であると感じた。この本を読む前、私は「いつか変わる」と甘く考えていた。しかし、「私たちは完璧にはなれない。ありのままの自分を理想に近づける努力が大切だ」ということがわかった。

読後は重たい気持ちも残ったが、共感と感動がとて強かった。飽きることなく読み進めることができ、人間性や知性の意味を考えさせられる一冊だ。ぜひたくさんの人に読んでほしい。

審査委員による講評

情報学部准教授 浦山 康洋

本作品は約 60 年前に発表された SF ドラマ小説であり、世界各国で映画化やドラマ化もされた非常に有名な作品である。筆者の書評は一文一文が簡潔で読みやすく、文章構成力の高さが際立っていた。その一方で、作品の濃密なストーリーを端的に、そして的確に伝えることもできており、読みやすさと情報量のバランスが取れた非常に引き込まれる書評となっていた。

書評の最後には「読後は重たい気持ちも残った」とあるが、これは本作品が持つ“感動”とは別の、切なさや儚さといった魅力をよく捉えている表現である。単にストーリーを追うだけでなく、作品のテーマに寄り添いながら自身の感性や思考を深めている点も高く評価でき、好印象であった。